

姉や義母等の叫び聲も聞える。

狂ふと云ふ字はケダモノの王と書いてある。

阿修羅の如くあばれ廻つた僕は、さながら火焰か地震のやうでもあつたらう。

僕の部屋から四五人が決死の勢ひで、布團を一枚宛頭からかぶつて、僕を包圍してとりひしがうと近寄つて來た時、僕は臍を固めて、木刀をかなぐり棄てゝゐた。

彼等の中の一人や二人を擲り殺す事はたやすいと思つたけれど、無益な殺生は、慈悲のおきてに反すると思つたのだ。

彼等とても社會奉仕の爲なのだ。

で組みつかれて、兩腕をネヂ上げられて、僕は彼等のなすが儘に身を任した。

僕を抱き竦めて、僕の部屋まで連れて來る。

「苦しいッ、心臓が干斷れる。

死に掛けても注射をしないやうにしてくれ」

頭に錐をもまれて、湯氣が毛穴から吹き出して、目はつり上つて了つた。